
魔法と科学（仮）

霊琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法と科学（仮）

【Nコード】

N0498Y

【作者名】

霊琉

【あらすじ】

科学と魔法が共存し、文明は更なる発展を遂げる。科学、魔法……それぞれが中心となるのではなく2つを合わせ持つ魔法科学。それは人類にとって正か負か……。

ランクとは……（前書き）

他の小説も書いてましたがどうやらスランプに陥り、調子を戻せるかどうかわかりませんが新たに小説を書くことにしました。

一応、気分転換としてのんびり書いていき調子を取り戻したら他の小説を進めるつもりですが此方の小説を優先させるかもしれないん。

ランクとは……

この世界の人々はランク付けされている。一般にランクと言えば総合ランクと呼ばれるもので魔力、知識、体力、魔法技術、武術の5つのランクを平均したものだ。

魔力は魔力の量、知識は筆記試験による結果、体力はスポーツの結果、魔法技術は魔法実技試験の結果、武術は選択武術の実技試験の結果でランクが決められる。

ランクはAからFまでそれぞれ三段階……例えばAであればA<A<A+の3つ。例外としてA+以上のSランク、落ちこぼれのGランクがある。Sランクは符合はなく、S<SS<SSSがあり、それにも当てはまらない場合はEXランクが用意されている。

ちなみに魔力ランクでは少量でもあればF、まったくない場合はGランクになる。

ランクが高いほど様々な利点がある。ランクが高いほど店などで料金が値引きされる金額が多くなり、S以上になると無料になる場合がほとんどだ。

また、ランクが高いほど職場で難易度が高く重要な仕事が割り当てられることが多くなり、それにより給料も高くなる。ランク判定試験は年に三回、春夏冬……学校では各学期の最終日終業式後に行われる。

ランク判定試験を受けなかった場合はランクはGになる。ちなみに60歳以降はランク判定試験は免除になり、今までのランク判定

試験で一番高かったランクになる。

ランク判定試験は幼稚園もしくは保育園で初めて受ける。魔力ランク判定は生まれた時に受け、そのランクで子供の教育方針を決める親も少なくない。

ランクには標準ランクというものがあり、高校以降の学校では標準ランクに満たない場合は退学になる可能性もある。ちなみに標準ランクはその対象になっている間に達するべきだとされているランクのことだ。

小学校低学年はF⁻、中学年はF、高学年はF⁺。中学校はE、高校はDが標準ランクになっている。専門学校や短大ならばC、四年制大学ならB。大学院ならばAだ。

基本、Aランクになればどんなところにも就職出来る。就職試験などで採用されるには最終学歴の標準ランクに達しているかどうか大きい。また、総合ランクが低くても特定のランクが高ければ採用されやすいときがある。

第1話

神江^{かみえ} 鷹史^{たかふみ}は私立神無月学園中等部三年だ。神無月学園は中高一貫校で有名大学に進む生徒が多い有名進学校の1つだ。

神無月学園には遠くからやってくる生徒も少なくなく、その生徒達のために寮が用意されている。鷹史は九州から来ているが寮は使っていない。祖父母の家に居候という形で暮らしている。鷹史が神無月学園に通う理由の1つは祖父母の家から一番近い学園からだ。

それだけなら九州内の家から近い学校にすれば良いのだから、それとは別に理由がありそれが一番の理由だ。

今日は一学期終業式。終業式を終えた学生達はランク判定試験を受ける。学校で行われるランク判定試験は終業式後、筆記試験を受け、機械を使用して魔力量を測定する。その後魔法実技試験を受け、一日目が終了。

二日目は午前中スポーツテストを受け、午後から選択武術実技試験を受ける。選択武術は柔術、剣術、弓術、槍術の4つから選ぶ。5つの試験を受けた後判定され、長期休業中に結果が届くようになっている。

鷹史はランク判定試験をサボり、祖父母の家に帰っていた。

「鷹史、今回も受けなかったのかい？」

鷹史^{やすえ}が家についた時、祖父の健蔵^{けんぞう}は庭の手入れをしていた。祖母の靖恵^{やすえ}はどうやら部屋でドラマの再放送を見ているようだ。

「ん、正直言つてめんどくさい」

「そうかい、高等部に入ってからにはちゃんと受けるんだよ」

「考えておくよ」

家に入った鷹史はテレビを見ている靖恵に帰宅の挨拶をし、自分に用意された部屋に入り鞆をベッドの上に放り投げた。

制服を脱ぎ私服に着替えた鷹史は家を出て商店街に向かった。ちなみに今までまともにランク判定試験を受けてない鷹史は無論Gランクだ。よって、店などでの料金は高い。

ゲームセンターについた鷹史はシューティングゲームをすることにした。襲いかかってくるゾンビを銃で倒していくゲームだ。全国でどれくらいの得点なのかランキングで表される。

「……余裕だな」

鷹史は最終ステージまでノーダメージでクリア。最高得点を叩き出し、ランキングは勿論一位だ。

「うわ、凄いね君。……高校生？」

鷹史が振り向くと同じくらいの歳である少女がいた。

「……中3だ」

「よかった〜同じだ。もし年上だったら……って話しかけてから思つて」

「……何か用か？」

明るく話しかける少女とは対照的に鷹史は声のトーンを落として話していた。

「え、えっと……特に理由はないけど話しかけたいな、と思って……」

最初は明るかった少女も、鷹史の態度を見ているうちにオドオドし始めて声も小さくなっていく。

「用がないなら帰る」

少女に背を向け、立ち去っていく鷹史を少女は慌てて追いかける。

「ま、待ってよ」

「何だよ！」

鷹史は振り返り少女を怒鳴りつけた。少女は怯えたようで少し涙目になっている。

「う、ごめんなさい。で、でも……あ、あの……どこの中学行ってるの？」

「……神無月だ」

「え！ な、ならランクも高いんだね……」

「いや、俺はGだ」

鷹史がGランクだと言うと、少女は目を見開いたあと鷹史を見る目を変えた。

「なあんだ、落ちこぼれか……まったく、ビビらせないでよ」

「……チツ」

鷹史が舌打ちしたのが聞こえ少女は鷹史を睨みつける。その目には軽蔑やら人を見下すような感情がこもっていた。

「ねえ、アンタさあ中3でしょ……中3でGランクって……何、魔力がないとか？」

「ランク判定試験をサボっただけだ」

「……サボった？　なら実際のランクは？」

「さあ、わからない」

鷹史がランク判定試験を受けていないと知り、若干少女は戸惑う。現時点では鷹史はGランクだ。しかし、まともにランク判定試験を受けていたら……。

Gランクは落ちこぼれと呼ばれるが、それはまともに試験を受けた結果Gランクになった人を言うことが多い。サボってGランクになった人の中にはSランクだった者がいたこともあり、迂闊にGランクを落ちこぼれと呼ぶと痛い目に遭う可能性がある。

だが、サボってGランクになってもメリットはまったくないのでサボるのは毎回日本全国で1桁以内だ。その貴重な存在を目の当たりにした少女は鷹史が実際に高ランクだったらどうしようかと考えていた。

「……そういえばお前、名前は？」

「わ、私？ 私は雪城 ゆきしろ 美玲 みれいだよ」

「……まさかすぐ教えてくれるなんて。俺は神江 鷹史だ」

「鷹史君か……。さっきはごめんなさい、まさかサボってるなんて知らなくて」

「……まあ、普通サボるのがいけないからな。仲がいい友達や先生、家族ぐらいしか知らないから」

謝られたことに戸惑いながらも鷹史は平静を保ち、話を続けた。

「えっと……神無月でGランクだと居辛くないですか？」

「たしかにGランクだと友達も数人しか出来ないし先生からも相手にされないな」

「……それでもサボる理由はあるんですか？」

「だって面倒だし、疲れるじゃん」

「た、確かにそうだけど……そうだ、携帯の番号交換しよ」

そう言つて美玲は携帯を取り出し操作する。鷹史もため息をつきながらも携帯を取り出す。

「構わないけど、何故？」

「だって明日から夏休みだし暇なら一緒に遊びたいなって」

「そうかい」

2人は携帯のポートを合わせて赤外線通信をして交換した。登録された鷹史のアドレスを見て美玲は満足そうに微笑んだ。

「……じゃ、帰る」

「あ、わかった。それじゃまた」

鷹史はゲームセンターを出て祖父母が待つ家へと帰った。家に入るころには日は沈み始めていた。

「ただいま」

「遅いぞ鷹兄！ おかげで夕飯が遅くなつたじゃないか」

リビングに入った鷹史に文句を言ったのは祖父母と一緒に暮らしてる伯父夫婦の娘である神江 瑠璃だ。ちなみにもともと伯母は夫を若くして亡くし娘の瑠璃を1人で育てていた時に伯父と出会い今に至るらしい。だから鷹史と瑠璃に血の繋がりは無い。

なお、伯父夫婦は共働きで2人がいない間、瑠璃の面倒をみているのは祖父母だった。

「すまない、ちょっと外で遊んできた」

「今度は俺も連れて行けよ」

「はいはい」

瑠璃の一人称は俺だ。男っぽい喋り方やしぐさが多く、色恋沙汰も聞いたことはない。ちなみに中3で鷹史と同じ学校……つまり神無月学園中等部に通っている。ランクはE+だ。

「そついえば鷹兄って何でランク判定試験受けないんだ？」

「面倒だから」

「面倒って……はあ、変わってるよ」

瑠璃は呆れたように鷹史を見る。

「はは、鷹史は高等部から頑張るそうだからね」

「考えておくだけだよ」

健蔵と靖恵はキッチンから料理を運んできた。鷹史は箸や食器を並べ瑠璃はお茶を全員分注いでいた。

夕飯を食べ終えたあと、先に瑠璃が風呂に入りその後鷹史が入った。鷹史が風呂から上がって自分の部屋で本を読んでいるとノックをして瑠璃が入ってきた。

「どうした？」

「鷹兄は明日暇？」

「暇だけど、どうした？」

「買い物に付き合ってくれないかな？」

「わかった。でも俺なんかで良いのか？ 俺と一緒にいるところを友達に見られたら……」

「大丈夫だよ。それに鷹兄は意外と女子から人気なんだ」

少し顔を赤らめ瑠璃は恥ずかしそうに鷹史を見る。

「え？ 何で人気なんだよ」

「そ、そりゃ格好いいから……って何言わせてんだよ！」

「……俺って格好いいか？」

「あ、ああ……ともかく明日付き合ってくれるんだよな。忘れるなよ！」

顔を真っ赤にしながら瑠璃は部屋を出て行った。

「いったい、なんなんだよ……」

不思議に思いながら再び本を読み始めた鷹史。すると鷹史の携帯が鳴った。鷹史は携帯を開き電話に出た。

「……美玲、明日は予定が入った」

『え！　そ、そうなんだ……』

「で、用事はなんだ」

『そ、それは……あ、明後日暇？』

「……暇だと思う」

『ならさ、今日のゲームセンターで遊ばない？』

「ああ、良いぞ」

『ん、じゃあ明後日……お休み』

「ああ、お休み」

電話を切った後、鷹史はため息をついた。

「いったい今日は何なんだ……もう寝るか」

本にしおりを挟め、鷹史は眠ることにした。

第2話

夏休み、部活に入っていない学生は昼近くまで寝ていることが多い。鷹史も例外ではなかった。

鷹史は何かの上に乘っているような重さを感じて目を覚ました。

「……何してるんだ」

鷹史が目を開けると目の前に瑠璃がいた。瑠璃は鷹史に馬乗りになっていた。

「なかなか起きてこないから様子を見に来たら寝てるからさ。……寝顔を見てたら夢中になって……ごめん」

「別にいいけど早く退いてくれ……重い」

「はあ！ お、重いって……女子に向かってそんなこと言うなよ！」

瑠璃は鷹史をポカポカと叩く。

「ちょ！ 待て。痛い、痛いから」

「うるさい！ 許さない、絶対許さ……ひゃっ！」

「……あ」

叩いてくる瑠璃の手を防ごうと手を動かしていた鷹史。不幸にも鷹史の手は瑠璃の胸を掴んでしまった。

しばらくお互いに硬直した状態が続いていた。その間、瑠璃は顔を真っ赤にして目の焦点が合っておらず、鷹史は顔を真っ青にして口をパクパクさせていた。

「た、鷹にいい？ あ、あの、その……心の準備がまだ……」

「こ、これは偶然だ！ 事故なんだ！」

「で、でも……鷹兄なら……良いよ」

「聞いて！ お願いだから話聞いて！ ……って言うか退いて！」

「鷹兄、俺のこと嫌い？」

瑠璃が潤んだ瞳で鷹史を見つめる。鷹史は顔を赤くして目をそらす。

「き、嫌いじゃないけど……。まず話を聞いてくれ！」

「あ、あの……キスしてください」

「はあ！ ま、待て、何故そうなる。お願いだから退いて！」

「お、俺……好きだよ鷹につ！」

瑠璃が今にも鷹史にキスをしようとした時、鷹史は瑠璃に頭突きをした。その衝撃で瑠璃は鷹史の上から転げ落ち床に叩きつけられた。

「い、痛！　つてあれ、俺は何を？　……あ、鷹兄、まだ寝てんのかよ！　早く起きろ」

「……お前、何してたか覚えてないのか？」

「？　何って鷹兄がなかなか起きてこないから様子を……あれ、何で額が痛いんだろう？」

「……忘れてるのかよ」

「何を？」

「いや、何でもない。着替えるから出て行ってくれ」

「あ、ごめん」

瑠璃が部屋を出た後、鷹史はため息をして着替え始める。ふと鷹史が時計を見ると午前10時2分だった。

「……休日にしては随分早く起きたな」

鷹史が部屋を出ると目の前には瑠璃がいた。

「さ、さっきはごめん。俺混乱して……その、さっきのことは忘れてくれ」

「あ、ああ」

「ありがと。……出掛けようか」

「今からか？ 午後からだとはかり……」

「えっと、昼もどこかで食べようかと考えてるんだ。駄目か？」

「いや、大丈夫」

「よし、なら行こう」

瑠璃は鷹史の手を握りしめ家を飛び出した。手をつなぎ歩く2人は誰が見てもカップルにしか見えなかった。

「……で、何を買いに行くんだ？」

「ん、服だよ。格好いい服を探したいんだ」

「格好いい服ね……」

鷹史は瑠璃の好みの服を知り、複雑な表情になる。瑠璃は女子だからもっと女の子らしい服を着て欲しい、鷹史はそう思っている。

2人が来たのは大型デパート『エール・ド・ランジュ』だ。数多くの店舗が入っており上の階になるほど高級な物を取り扱っている。七階建てのデパートで最上階は有名ブランド店や高級レストランがある。

2人は庶民からして少し高めの物が売っている3階にいる。4階からは富裕層、所謂金持ち達を対象にした店が増えてくる。その為、庶民は3階までしか行かないことが多い。

「なあ、このジャケットどうだ？」

「ああ、格好いいと思うぞ」

瑠璃は鷹史にどの服が良いのか聞くが、鷹史は服は着れば何でも良いと思っているので適当に答えている。瑠璃が服を選んでいる間、鷹史は退屈そうにキョロキョロしていた。

瑠璃が数着購入した後、2人店を出ようと入り口辺りまで来た。

「おや、誰かと思えば瑠璃さんではありませんか。お買い物ですの？」

「あ、園咲さん」

瑠璃に声をかけてきたのは園咲 香織^{かおり}。園咲財閥の次期当主である香織の近くにはボディガードが数人いる。園咲財閥は様々な分野に進出している。医療関係や自動車関係、情報関係など進出している分野においてほとんどがトップクラスだ。

園咲財閥は神無月学園に多額の寄付をしていて、さらに大物政治家とつながっているという噂もある。ちなみに香織は神無月学園中等部の生徒会長をしている。基本、学園の先生は香織にかなり甘く言うことも聞く。そのため生徒も香織には逆らわないし悪口も言えない。

「そちらにいるのは……ああ、落ちこぼれではありませんか。どうして瑠璃さんと落ちこぼれが一緒に居るんですか？ ……あれ？ そういえば名字が一緒ですね」

香織は瑠璃を見て笑顔だった。が鷹史を見て不機嫌そうな顔をした。

「あ、従兄弟なんです」

「従兄弟ですか。瑠璃さんも大変ですねGランクの落ちこぼれが従兄弟とは……」

「……瑠璃、俺は先に帰るから」

「あ、鷹兄……」

鷹史は瑠璃を置いて店を出て行った。

「あら、もしかして機嫌を損ねられましたかしら。……Gランクでなければ素敵な方ですのに」

「え？」

「顔立ちも整っていて、優しい御方だそうで……私の御学友からも人気があるんですよ」

「へえ、そうなんだ。……園咲さんは鷹兄のことどう思いますか？」

「格好いい御方だとは思いますが。もしランクがもう少しほど高ければお付き合いしたいと思ってます」

香織は顔を赤らめながら俯く。

「た、鷹兄のこと……」

「き、興味があるだけです！それに、私には許婚が……」

「い、許婚！　で、でも結婚って本人達の意味が……」

「……相手は魔術協会会長曾根崎　雅史まさふみさんのお孫さんだそうです」

まだ会ったこともありませんし名前も知りませんが、と俯いたまま香織は言う。

魔術協会とは魔法に関すること全てにおいてを管理する組織で、世界中に存在し、世界一の規模を誇る組織だ。本部は日本に存在する。魔法が関係する犯罪は警察ではなく魔術協会が扱うことになっている。

また、その犯罪者も魔術協会が扱い、魔術協会本部および各支部の地下にある牢屋に閉じ込められる。

魔術協会に入る最低条件はB＋以上であること。魔術協会の仕事は魔法による犯罪など事件解決が多く、それくらいの力がないと危険だからだ。

「そ、そうなんだ……」

「お嬢様、他人に無闇に話すことでは」

「他人ではありません！　私の大切な友人です」

「……園咲さん」

「……あの、先程は鷹史さんに落ちこぼれと言ってしまい申し訳ございません。それでは、また」

「は、はい」

香織に大切な友人だと言われ嬉しく感じつつも、鷹史のことが好きだと知り複雑な気持ちの瑠璃だった。

第3話

鷹史はゲームセンターに来ていた。昨日は瑠璃とデパートに買い物。今日は美玲とゲームセンターで遊ぶことになっている。

「あ、鷹史君待った？」

鷹史がゲームセンターの入り口で待っていると、美玲が走りながらやってきた。

「いや、今来たところだ」

「そう、良かった」

そう言って美玲は鷹史の手を握りゲームセンターに入っていく。

鷹史は恥ずかしいのか頬が赤くなっている。

「あ、このぬいぐるみ可愛いな」

美玲が足を止めたのはクレーンゲームの前だった。中には有名なアニメのぬいぐるみが所狭しと敷き詰められていた。

「頼むよ、私の五百円！」

美玲は五百円硬貨投入口に一枚の五百円玉を入れ込む。このゲームセンターのクレーンゲームは1プレイ二百円だが、五百円で5プレイとかなりお得なので五百円を使う人が多い。

「よし、頑張るぞ！」

1回目、美玲が狙っているのは『シロちゃん』と言うアニメに出る主人公シロ（猫）のライバルであるクロ（犬）のぬいぐるみだ。

鷹史は詳しく知らないが、『シロちゃん』というアニメはかなり人気だ。捨てられたシロが飼い主となる人間に拾われるシーンから物語は始まる。その飼い主はクロという犬を飼っていてシロとクロはどちらが飼い主に可愛がってもらえるかを争う。

その中でいつしか二匹の間には友情が芽生えるという話だ。

「ああ、失敗したあ！」

美玲は頭を狙っていたようだが、クレインのアームが思っていたよりしっかりと挟まなかった。

「つ、次だ」

2回、3回と挑戦するがまったく取れる気配はない。4回目も失敗した時、美玲が鷹史を見る。その目は少し潤んでいて、美玲は唇を噛みしめていた。

「……わかった。俺が取ってやる」

鷹史は美玲と場所を変わり、狙いを定める。美玲はその様子をじっと見守っている。

「……よし」

アームはぬいぐるみの首輪に引っかかり……2つのぬいぐるみを掴み上げた。

「う、うそ……」

アームが掴み上げたのはシロとクロのぬいぐるみだった。アームはそのままぬいぐるみを開口部に落とす。美玲は開口部からぬいぐるみを取り出す。

「あ、ありがとう鷹史君」

ぬいぐるみを抱きかかえて鷹史は微笑む。

「さて、次は？」

「うん、頼んでもいいかな？」

「ああ」

その後、美玲が欲しいと思った景品があるゲームをしていき、鷹史はそれらを全てゲットした。2人がゲームセンターを出る頃にはゲームセンターのビニール袋をたくさん提げていた。

「……取りすぎだな」

「あはは……でも楽しかったよ。今日はありがとう」

「ああ、俺も楽しかったぞ」

「本当？　なら、また……」

「もちろんだ。じゃあな」

どこかの森の奥深く、光がまったく差し込まない暗闇の中にその建物があつた。

「空間同調率3%……実験失敗です」

「……チツ」

部屋の中心に向かってレーザー光が当てられ、周りには様々な機械が並び数人の白衣を着た人がいそいそと動いていた。それを見下すように2階のとある部屋の窓からその様子を見ている若い男性。男性がいる部屋には高価なパソコンと様々な資料が机に積み重ねられている。

その男性、椿原^{つばきはら} 功^{こう}は天才魔法科学者と呼ばれている。

「いったい、どうすれば……」

功は異次元世界があるかどうかの実験をしている。異次元においては様々な議論がされてきた。だが、議論だけでは解決はしない。魔法により瞬間移動はできる。だが、別の次元に移動はできない。

そこで、功は考える。瞬間移動の魔法に科学の技術を使うことは出来ないのか……。功は様々な実験をして地球上であればどこにでも瞬間移動できる装置を開発し、今では海外を行き来するのに使われている。

その技術を使って異次元へと行く手段を探しているのだがまだ成功しない。

「……やはり異次元は存在しない、か」

功は諦めようとしていたが、1階の実験室が慌ただしくなってきたようだ。

「いったいどうした！」

「つ、椿原博士！ 空間同調率が上昇、もうすぐ100に到達！」

「何っ！ 今すぐ向かう」

功が部屋を飛び出しさきほど窓から見ていた部屋に向かう。その部屋に着いた時、部屋を中心に1人の男が傷だらけで倒れていた。まるで剣士のような服装だ、と功は思った。

「おい、その男を医務室に運べ」

「わ、わかりました！」

男がどこから来たのかわからない。だが、見たことがない服装だ。功はもしかしたら実験は成功したかもしれないと思っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0498y/>

魔法と科学（仮）

2011年11月6日12時30分発行